座談会：外部評価を終えて
DISCUSSION: After external evaluation

参加者　岡崎甚幸，高橋康夫，古阪秀三，大崎 純，石田泰一郎　　編集：大崎 純

□何のための外部評価か

石田：　まず，今回外部評価を行うに至った経緯を高橋先生にお話しいただけないでしょうか。

高橋：　皆さんご存知のとおり，建築系専攻改組のため文部科学省と折衝した際に，外部的な評価を行っておいた方が良いという指摘を受けたため，改組に関係している７専攻が一体となって外部評価を受けることになりました。改組という目的のためには大学院の専攻だけでいいのですが，それだけでは外圧を受けて行っただけという感もあり，さらには学部の授業評価もすでに行っていたので，建築学科も同時に評価を受けることになりました。学科の評価は珍しいですね。

石田：　京大の工学部では他に例がないようです。

古阪：　手続きとしては，まず自己点検・評価を内部で行って，その報告書をみて，外部の人が評価するということですね。

大崎：　そうです。このような筋道は，自己点検を行っている際に，全教官に十分に理解されていなかったように思います。

石田：　外部評価にはいろいろな形式がありますが，今回は自己点検と外部評価が対になっているということです。

古阪：　トップ30などに関連した評価が出版されていると聞きましたが...

石田：　民間の団体や出版社から出版されています。

古阪：　京大建築は，そのなかの系によって評価が大きく違ったようですね。ところで，今回の外部評価は，改組に絡んでいますが，一応は任意ですね。

高橋：　今回の外部評価は自主的なもので，外部の方々に各専攻の状況を知っていただくためのものですが，同時に実施した７専攻の中でも，そのとらえ方に温度差があったと思います。

古阪：　任意ではなくて，JABEEの関係のように，半強制的に評価を受けるというものはないのでしょうか。

高橋：　大学評価・学位授与機構によるものがあり，京大では医学部と理学部がすでに受けており，今年工学部が受けるという噂もありました。

古阪：　せっかく自己点検・評価を行ったのですから，これを機会に受けておいた方が良かったかもしれませんね。

高橋：　そうですね。しかし，今何らかの評価を受けておくと，後々は，若干の追加で済ませられるのではないかとも考えられます。

□評価の基準と自己点検の目的

大崎：　今回の評価において，一番の問題は，評価の基準を明確にしないで自己点検・評価を行ない，その報告書をもとに外部評価をしてもらったということではないでしょうか。

高橋：　工学研究科の中では，.化学系がすでに評価を受けており，共通のフォーマットで受けた方が文部科学省としてもわかりやすいのではないかということで，7専攻の専攻長会議でも，評価の基準については議論されませんでした。

古阪：　７専攻では評価項目は共通でしょうか。

高橋：　本質的には共通ですが，建築では独自の項目を加えています。

古阪：　自己点検は外部に対するアピールの意味が強いですね。論文の数だけではなく，どのような面で自己アピールをするかについて，合意をしておけばよかったですね。

石田：　今回の自己点検・評価報告書は，自己点検というよりは専攻の内容や方針の情報公開に近いですね。アメリカに始まって国内でも用いられているような典型的な形式をとっていますが... しかし，本当にアピールしたい内容が込められていたかどうかは疑問です。

高橋：　将来構想の章は，網羅的だという批判もありましたが，多くの先生の意見を取り入れて，かなり充実した内容になっていると思います。個人的には，改組を控えて，将来進めていきたい方向が，学外の人にどのように映るか聞いてみたいという気持ちもありました。その意味では将来構想の内容は良かったと思います。

石田：　報告書を作成していて，将来構想委員会で議論していてよかったと思いました。教育の方も，教育基本構想委員会，授業評価アンケート，FDシンポ（ファカルティ・ディベロップメント・シンポジウム）があったので，内容は既にそろっていましたが，それらを発掘するのがたいへんでした。

□授業評価アンケートとFDシンポ

大崎：　FDシンポと外部評価は連動していたのでしょうか。

高橋：　ある意味では連動していたと思います。評議員の荒木先生は，FDシンポの報告書を社会に公開して，直接的な評価でなくても，それに基づいて意見を聞くということを考えておられたようです。

岡崎：　FDシンポの前に授業評価アンケートがあったわけですね。アンケートについては，学生にも，集計された教官の方々にもたい

へんなご苦労をおかけしました。FDシンポについては，パネリストの先生方は色々と工夫をされました。建築学科のFDシンポの特徴としては，3つの系に分けて議論がなされたことが挙げられます。その系の中で，私が関係している計画・設計は，工学部のほかの学科にはないので，他学科の多くの先生に興味を持っていただき，いろいろなコメントをいただきました。シンポジウムで，教育の専門家の先生が２人おられましたが，教育する方とされる方が，患者とセラピストのような関係で話をするというようなところが設計の特徴ではないか，それが学生の興味を惹いているのではないかと感じました。設計・計画の分野の位置付けを再確認できたと思います。

大崎：　全ての学期でアンケートを行うのは大変な手間ではないでしょうか。学生も，毎回書かされるのはうんざりではないでしょうか。

古阪：　各教官の分担作業で，それほど手間が集中しないので，アンケートを実施することはいいのではないかと思いますが，数年に１回でも良いかもしれません。ただ，内容については疑問があります。提案や批判をもっと書いてもらえるような形式にならないでしょうか。

高橋：　昨年度後期のアンケートでは，学生も相当嫌がっているという感じでした。毎学期行うとまともな答えが返ってこないので，個々の教官が行うのは別として，学科としては毎学期行わなくてもいいと思います。

岡崎：　各教官が，学期の中間か終わりぐらいに自主的に意見を聞くのが一番良いのではないでしょうか。全体で公式行事化すると，各教官の授業の改善に繋がりにくいですね。

高橋：　カリキュラムの変更の必要があるときには全体で実施すれば良いです。昨年度，前期・後期とも実施したのは，今のカリキュラムができて6年経っているということもあります。その意味では，カリキュラムの改善への反映は，これからの作業にかかっています。

大崎：　改組もありますので，カリキュラムは改善しないといけないですね。

古阪：　学生は，個々の授業の評価をしたのであって，カリキュラムについての意見は書いてないのでは...

岡崎：　そのようなことはないです。例えば，3年に授業が集中しているとか...

高橋：　授業内容の重複についての意見もあります。

古阪：　他の教官との重複に気がつくのは困難ですね。

高橋：　ですから，授業内容についての情報交換が必要になります。基本的にはシラバスを見ればわかるので，自分でチェックできますが...

岡崎：　設計演習でしたら，毎年はじめに担当教官が全員集まって，授業計画を作っています。

高橋：　計画系のほかの科目についてもそのようにするべきです。

古阪：　FDシンポも，あのように大々的にやるのではなく，建築の中で科目ごとに行って，学生をオーディエンスにして意見を聞いた方がいいのではないでしょうか。他の先生の授業方法も参考にできるかもしれません。毎年でなくても，数年に１回でもいいです。あれだけ大々的なのは，パフォーマンス的で，実質的な意味はないですね。

高橋：　建築学科では，授業評価を実質的なものにするため，全科目で実施しました。他の学科は数科目しかしていないです。その意味で，FDシンポに出席された専門家の先生には，興味を持っていただいたと思います。ただ，本当に問題のあるデータは掲載していないので，全て見たかったと思っておられるかも知れません。

古阪：　問題があっても，事実であれば，各教官の承諾を取って公開してはどうでしょうか。

高橋：　勤務評価につながるので難しいです。

古阪：　一番難しいのは出席者数ですね。出席者は科目や授業内容だけでなく，授業の時間帯にも依存しますし...

大崎：　出席をとるかどうかにも依存しますし，寝ている人は出席者に入れていいのかという意見もあります。

古阪：　いずれにしても，授業方法のディスカッションができればいいですね。

高橋：　アンケートの内容から，授業方法改善の方策はいろいろ見つかります。

古阪：　それから，これだけ講義のためのツールがあるのに，講義室があまりにも貧弱。

大崎：　プロジェクタは常設してほしいです。

高橋：　工学部で常設されていないのは建築学科だけですね。

古阪：　今日もプロジェクタのトラブルで30分無駄にしました。桂への移転があるので，現段階で講義室に投資するのは無駄ですが...

石田：　ここ1，2年で，プロジェクタの使用頻度は増えましたね。修論の公聴会でも環境系ではほぼ全員が使っています。

□桂移転について

岡崎：　桂への移転は，教育用設備の充実という意味で，あるいは学部授業の改編という意味で非常に重要です。教育基本構想委員会で，桂と吉田での授業の形態についてシミュレーションしましたが，予測できないことがいっぱいあります。学科あるいは専攻の図書館もなくなりますし，状況が大きく変わるので，今回の授業評価の内容も意味がなくなるかもしれません。教授会などの諸会議の場所も見当がつきませんし，学部の講義室の設備どころではないともいえます。

古阪：　学科会議のときに，「わからないことリスト」を常に掲示し

てはどうでしょうか。個々の人はいろいろ移転問題に関して疑問や問題意識をもっているのに，全体として何も進まないのはまずいと思います。移転の時期や場所も曖昧ではないでしょうか。

高橋：　学部の授業は，悲惨な状況になるかもしれません。設計演習は成り立つでしょうか。

古阪：　前もって想定して，改善しておかないといけないですね。

□京都の中の京都大学

古阪：　京都大学の社会への役割の面からは，京都駅の問題や，御池のマンション問題も重要です。世の中の人が見たときに，京大の先生の関係はどうなっているのかという疑問があるのではないでしょうか。このようなことについても，大学の中でしっかり議論しなければならないですね。ひどくなると，街の人や，学会の人が京大の先生を信用しなくなることが危惧されます。京都では，行政の人も京大卒が多いわけだから，うまく機能すれば，京大の学風を利用して，きれいな町並みを再現できるのではないでしょうか。現在の京都は非常に中途半端ですね。マンション業者だけが儲けている状況です。

岡崎：　今のままで京都の町並みを保全するのは無理で，特別立法やそれなりの研究組織などで支援をして，国民的な価値を考え直す時期ではないかと思います。ある意味で，国家的な緊急課題ではないでしょうか。例えば国際会議をするにしても，日本では京都が第一の候補ですね。でも，京都に来てみると，桂離宮や修学院離宮は良かったけど，街の中はとんでもないのではないかといわれます。京都の責任ですが，一方では国全体の問題ですね。日本の若い人たちの興味が日本文化や歴史にあまり向いていないということでしょうか。

高橋：　建築系専攻の将来構想に挙げないといけないですね。

古阪：　高橋先生がリーダーシップをとって旗を振っていなければならない状況ではないでしょうか。京大が中心にならないと，行政だけでは無理でしょう。京都大学だけが責任をとるというわけではないですが，オピニオンリーダーとはなるべきです。もともと京大に歴史講座ができたのも，歴史は京都でという発想があったと思います。

岡崎：　そういう意味では教育の内容も点検すべきで，例えば，ほとんどの学生は，桂離宮などへ行っていないですね。学生がほとんど京都に興味を持っていないということなんですよ。日本人で建築の勉強を始めようとする学生が，京都に興味を持たないということは，京都が単に日本の一つの都市としか見られていないということを物語っているのではないでしょうか。それは歴史の先生の責任ではなくて，あらゆる分野の教育の問題ですね。

古阪：　京都の街の問題のように，内部の人間も外部評価の先生も気がついていたけど今回の外部評価には含まれなかったようなことを，将来の目標に加えるというのは重要だと思います。そのために，どのような組織でどういうタイミングで議論するかが問題になりますね。あまり多人数だと困るし... 外部評価書を一字一句読んで，中期計画を立ててみるのも良いでしょう。まずは外部評価の自己点検ですね。

石田：　そのための自己点検・評価ですね。何年か毎に点検して，改めるべきところは改めるという... それをやらないと有効な意味は持たないでしょう。

□事務・研究組織と学生の教育

古阪：　外部評価の中で，事務スタッフのことが完全に抜けています。研究活動に対して事務スタッフがどのぐらい貢献できているのか。あるいはできていないのか。能力の問題ではなくて，システムの問題として非常に疑問に思っています。今の非常勤職員は，学科事務の負担が非常に大きくなっているので，研究室の仕事をお願いしにくくなっています。ですから，結局は教育研究のスタッフは，研究室で雇わないといけない。これは欧米の普通レベルの大学と比べると，とても大きいギャップだと思います。ですから，教官だけの評価ではなく，学科としての教育・研究に対する体制の評価も必要です。

岡崎：　我々は，研究以外のことに使う時間が多いですね。このような状況を改善しないと，先端的な分野で国際的な競争に勝てないと思います。外国の先端的研究をしている分野だと，教育・研究の補助の人を雇うために多くのお金が出ています。日本では，その代わりに大学院の学生を使っている状況です。京大の学生は優秀ですが，それほどでもない大学もあります。

大崎：　RA や PD の採用も簡単にしてほしいですね。

古阪：　このような事務や組織の評価は自己点検・評価書のどこに書けばいいのでしょうか。大学評価機構の評価にはこのような事項は入るのでしょうか。

大崎：　自己点検・評価報告書にも TA や RA の数は出ていますね。

古阪：　でも，今回の評価は自主的なものですから，どこかで目にとまって改善策を考えてくれるというようなことには繋がりません。組織の問題に限らず，報告書に書いたことがどのような効果に繋がるかも，あらかじめ考えないと，評価項目を選択しにくいですね。

石田：　例えば，トップ 30 に認められると，それなりの資金が来ますね。全体の合意が得られれば，それをポスドクなどの人件費に使えるのではないでしょうか。方針さえ定まれば，お金や設備の問題は何とか工夫できるものだと思います。

高橋：　建築系からも，研究費の使途についてそのような案を出しています。ところで，学生を使うことについての反対意見は，工

学研究科内では少数派ではないでしょうか。どちらかというと，実際に学生を使っているので，資金的なバックアップをしないといけないという趣旨ですね。

岡崎：　ええ。ただ，学生ですからそれなりの期間でいなくなりますし，学生には教育しないといけないので，個人的には，学生に研究支援をさせるというのは，ある程度便宜的ではないかと思います。本当に先端的な研究というのは，そのような形式ではなくて，しっかりしたチームが組織されて行われているわけですね。教育制度の委員会などでも，お金を出すのは便宜的なものとして認められていたと理解しています。

古阪：　罪滅ぼしみたいな... 無償で使っているのを避けるというか... 海外では完全に雇用するわけですね。日本では，最近は変わりつつありますが，終身雇用のため，短期的な雇用形態が困難でした。お金と雇用制度の両方の問題を考えないといけないですね。それから，学生を使った場合，企業秘密の問題があります。企業と共同研究したとき，学生はライバル会社に就職するかもしれないですね。その場合，守秘義務があるといっても，職業人でないと難しいです。そのあたりに矛盾を感じています。

岡崎：　特許の問題もあって，修士論文の位置付けも難しいですね。

古阪：　論文を書くか，特許申請するか選択しないといけない。多少技巧的にいえば，学術誌やシンポジウムに投稿するときに，特許申請のタイミングをうまく工夫すれば論文発表と特許申請が両立することがあります。でも，投稿と修論の締め切りが近いとややこしくなります。ですから，研究成果を論文として評価するのか，特許として評価するのかというのはデリケートな問題です。

石田：　特許の話と関連しますが，修士論文を教育とみなすか研究とみなすかのコンセンサスがあるのだろうかという疑問もありました。

大崎：　指導教官の評価という面もありますね。

古阪：　書かせるのは教育ですが，成果は研究ではないでしょうか。

岡崎：　特許申請したら論文は要らないとか...

古阪：　申請はお金さえ出せばできます。申請だけではなく，申請と同時に公表させる義務を課せばいいかもしれません。修論に対して必要とされるレベルついては，系間で合意もできていないですが，学生にとって不公平感があるとまずいですね。教育か研究かということではなくて，修了に必要なレベルについての合意は必要です。黄表紙レベルというのは計画系ではまだ残っているはずですが。

□学生の教育と就職

岡崎：　社会へ出て技術者として活動するための教育に関しては，プロフェッショナルスクールの問題があります。法学部や経済学部ではそのような動きが具体化されています。建築の計画系では，UIAと関係してまだ流動的ですが，いずれにしても避けて通れない問題で，JABEEよりも大きい問題です。構造系や環境系でも同様の話があると思います。プロフェッショナルスクールと研究との関係も整理しないといけないのではないでしょうか。

古阪：　日本では，JIAとAIJが協力して検討するということですか。

岡崎：　そうではなく，京都大学の問題ではないでしょうか。ただ，国際資格も流動的で，JABEEも揺れ動いています。JABEEの評価を受けるとなると，京大はこの外部評価をそのまま使えるのですが...

古阪：　京大が標準仕様となると困りますね。

岡崎：　はい。典型的な建築学科の例としては学科の規模が大きすぎます。

古阪：　土木学会には呼称は正確ではありませんが，上級技術師というのがあります。土木は非常に戦略的で，この上級技術士の制度もAPECのプロフェッショナル・エンジニアの相互認証制度への対応であると聞いています。全てを土木的にやればいいとは思いませんが，建築のほうはのんびりしていて，後手後手になっているように思えます。建築と土木は，行政的には建設に含まれますし，最近はある意味で土木がどんどん建築寄りになってきています。設計施工一括発注についても，公共土木工事に採用されるようになりました。大学教育も土木は積極的に改革をやっています。建築における資格とか制度問題は，大学でも学会でも議論しないといけない。現在の建築学会は，外部への情報発信等の対応は評価できますが内部固めの面で弱いように思います。

岡崎：　外部評価委員会で，就職の問題が挙げられましたね。とくに，設計事務所が少なく，建築に関係する施主側が多いという問題があります。これから改善されるのか加速されるのか分からないですが，この件に関する我々の立場を明確にしておかないといけないです。建設業全体のありかたの変化にも関係しますが...

大崎：　建設業からの需要が減っているのは間違いないですから，学生数を維持するためには，周辺分野への就職はやむをえず，そのための教育も必要ではないでしょうか。古阪先生は，将来構想を検討する際に，発注者側の教育の重要性を指摘されていましたね。

古阪：　基本的には，建築学科は産業と1対1に対応した学科ですが，職能という意味からは，多方面と関係するべきで，その意味では健全になりつつあるのではないでしょうか。ネコも杓子も設計事務所やゼネコンではなく... ただ，就職先によって教育内容は変えるべきで，単純に構造教育，設計教育，設備教育というのではなく，もっと横断的に，歴史や経済，法律といった教育も必要です。そういう流れの中では，マネジメント教育も必要だし，発注者教育も重要になってくると思うんです。事実，発注者側に就職する者が少なからずいるわけですから。そうすると，現在の履修規定での他学部他学科3科目8単位以内を卒業単位に認定するという制約は非常に

おかしい。指導教官が認定すればもっと自由であっていい。それから，選択必修の単位数の制約もある。これらを緩めてはどうかと思います。

岡崎：　私がアメリカにいたときのクラスメートで現在建築家として活躍している人が最近来たのですが，アメリカでは，建築家は建築の設計教育しか受けていないものだから，文章も文科系の人に比べて下手で，タイプも遅い。その人が，建築家はこれからは多方面の教養を身につけなければいけないと強調していました。今後は建築のトータルとしての姿が変わってきても良いのではないでしょうか。アメリカのトップクラスの大学では，他分野の知識を持つ人を建築の大学院で受け入れています。建築ばかりでなく，ランドスケープアーキテクチャの分野もそうです。我々も大学院の入試の方法を考えなければなりません。内部の学生しか合格しないというのではなくて，もう少し多様な方法があっても良いのではないでしょうか。外部評価でも指摘されましたが...

古阪：　そういう意味では，東大は違いますね。他大学からの入学者が多いですし，英語は合格の足切り的な機能があるようですし。京大でも，TOEICの点を単純に加点するのは考え直すべきで，有資格者の認定要件程度に使ってはどうでしょうか。でないと現状では，いくつかの専門科目よりも配点が高くなっています。

石田：　改組まではあまり変更しないということでしたね...

高橋：　でも，そろそろ真剣に考えていかないといけないですね。

□ traverse について

大崎：　外部への情報発信という意味で，traverseの出版は評価されたでしょうか。

高橋：　どの程度販売あるいは寄贈しているのですか。

石田：　500部印刷して，無償配布が百数十部です。

古阪：　3号まで出した後で，公式的なものに移行するのを検討してどうかと思います。今回は，外部から鈴木博之先生にも寄稿していただきました。他大学では，traverseを手本に出版を検討しているところもあります。

高橋：　対外的には，非常に大きい役割を果たしていると思います。

石田：　今回の外部報告書は単なる情報公開とも言えますが，traverseは，数値化できない情報の発信ですね。

高橋：　オフィシャルなものになると，いろいろな規制がかかるということはないにしても，組織として問題のある内容も出てくるので，有志による販売という形式を維持してはどうでしょうか。

石田：　「建築学研究」はどのような形式だったでしょうか。

大崎：　「建築学研究会」の出版で，会員に会費をもらうという形式です。

古阪：　ある意味で有志ですね。traverseも3号のあとで何かの提案をしましょうか。

□次回へ向けて

大崎：　話を外部評価に戻しまして，次回あるとしたら，どのような準備が必要でしょうか。岡崎先生は退官されていますが...

古阪：　岡崎先生には評価委員として来ていただいてはどうでしょうか。やり方が良くなっているかどうかの評価をしていただくために...（笑い）

岡崎：　東大は東大出身の外部評価委員もおられたですね。

古阪：　東大の場合は，他所から来てもらう必要はないという感じですか。しかし，外部評価ですから原則的には出身者など関係者をはずすべきでしょう。

岡崎：　いずれにしても，自己点検・評価書を実際にまとめられた先生はご苦労様でした。論文がいくつか書けるほどの手間だったですね。

石田：　そのあたりの手続きの問題も考えないといけないです。今回は初めてなので，資料をいろいろなとことから発掘しましたが，次回に向けて，誰がどこでどのようなデータを管理するのかを決めておけば報告書作成時の労力がは減らすことができます。

岡崎：　昨年の12月頃は悲壮でしたね。

石田：　事務の人に相当手伝ってもらって，資料を調べました。移転後は，事務の体制も不確定ですが，資料の保管方法も検討しないといけないですね。整理ができていれば，教官個人に聞かなければならない内容は少し減ると思います。例えば，学位授与者や博士課程志願者数などは，今回は工学広報や学科会議資料をめくりながら調べました。外部評価の内容は，教育，研究と社会的活動に分けられますので，それぞれに担当の委員会を設けて，次回が5年後でしたら5年間のデータをそろえて，総括も含めて各委員会で執筆してはどうでしょうか。

岡崎：　次回は何を評価基準にするのかが大事ですね。今は，社会全体のコンセンサスがあって，その中で大まかな基準が決まっています。とくに国際化が大きなテーマで，今回の評価でも，化学系や情報系の基準が国際的であるとされています。しかし，それで本当に良いかというと疑問で，流動的です。次回は，特殊法人化してしばらくした段階でしょうから，事態は大きく変わっているでしょう。あるいは何も変わっていないかもしれませんが... とにかく評価基準は外の状況との関係が強いので，今考えるとしたら，全体としてどのような方向に進みたいからそのような評価をするという話になるのではないでしょうか。先ほどの京都の問題と関係しますが，京都の個々の建築はすばらしいにも関わらず，町全体でみると無茶苦茶です。木造主体の国際的都市というのが京都の国際的なキャッチフレーズですが，木造なんてほとんどないし，大学でもほとんど教

えていないですね。そのような意味で，建築学が，学術や教育の面で社会的な役割を果たしているかというと疑問です。そういう視点から，本来の自己点検は行われるべきではないでしょうか。

古阪：　独立法人化されると，何が目標になるかは誰も分かっていないのではないでしょうか。研究費をとることが要求されるならば，とれそうな人は努力しなければならないですが，共同研究，受託研究など種目のうちのどれが望ましいかも分からない。早く大学が方針を決めないと，我々は目標を決められないですね。また，社会に対する啓蒙活動は，独立法人化されるとますます重要になるでしょう。外部からの大学院への入学も重要です。大学開放という意味では東大に完全に負けてしまっています。今回の評価項目の中で，独立法人化に照らして何が重要か，共通認識が必要です。

石田：　外部の環境が流動的であるとしても，専攻としての何かコアとなるものが必要ではないでしょうか。

大崎：　今回の外部評価の反省は十分にされたでしょうか。例えば，国際交流が活発でないという指摘に対しては，外部評価委員会の際に，なぜ活発でないかという説明はされましたが，それではどのように改善しましょうかという話はまだ始まっていないですね。

高橋：　いろいろご指摘いただき，自ら反省しなければならないことや批判的なコメントもあるので，それらをどれだけ真摯に受けとめるかというのは大きい課題ですね。非常に難しいと思いますが...それから，現実的な話として，独立法人化に絡んで，近いうちに中期目標・計画を策定しなければなりません。中期計画は実際に達成しなければなりません。トップ30に関連しても，目標と計画を作らないといけません。ですから，全体の整合性をとって計画を立てて，実際に達成しなければならないので，外部評価の反省と将来構想は連動すると思います。昨年は将来構想として多くの目標を挙げましたが，その中で6年で達成できるものを選ぶ必要があります。また，6年でだめならば，次の12年目で達成できる目標も必要です。今までは個人ベースで研究してきましたが，これからは組織として動かないといけないですね。

古阪：　高い目標を設定して達成できなくなるのを避けるため，低い目標を設定して達成できるようにするということに対する批判もありましたね。目標としては，具体的にはどのようなものが考えられますか。大学院への社会人の入学を増やすとか...

高橋：　そうですね。そのような目標を掲げたとき，それを可能とするように組織改革を行って，6年後には結果が出ていないと極めてまずいですね。

古阪：　過程の評価の方法も決めておくのでしょうか。高い目標を掲げて達成できなかったときに，何らかの努力をしたことに対する評価とか...

高橋：　組織内部で決めておけば良いのではないでしょうか。

古阪：　社会貢献に関係する目標としては，例えば，あるプロジェクトがあって，組織として全面的に対応してみるというのは，研究の実践活動という面からも端的な例になりますね。建築特有の事情を考えて，目標を掲げる際にも工学部の他の専攻とは違うセンスを発揮したいですね。

高橋：　表に出る計画とは別に，組織内部の将来構想や自己点検基準を持っていたほうが良いと思います。大学評価機構による評価については，基準に関して意見を言うことはできないですね。最近見た例では，少人数セミナーなども評価基準に入っていました。

古阪：　少人数セミナーというのは，大学として奨励しているのでしょうか。建築教育として重要視されているのでしょうか。もし，奨励されているのならば，もっと貢献しようという先生は結構おられると思います。しかし，目標や評価のベクトルがどちらを向いているのかも分からないですね。

高橋：　基本的にはボランティアですから，活発に行えば建築学科の活動として評価されるのではないでしょうか。自己点検でも評価できると思います。

石田：　今のような議論は，目標設定や結果の評価が比較的容易な項目ですが，それだけでは数合わせのようになってしまいますね。そうではなくて，建築系専攻としての目標や理念を共有して，中期計画などはそれに整合する形で作成するということが基本ではないでしょうか。

大崎：　やはり，強力なリーダーシップが必要ですね。若い教官には分からないことが多すぎますので，いろいろな情報を入手できる立場にいる人に，方向性を示していただきたいです。単に研究活動に絞っても，専攻としての目標を掲げて全員がそれを支援するという形が望ましいです。

石田：　社会的貢献については，自己評価は難しいですね。その達成度は一律に評価できないので。

岡崎：　さきほどの京都の話も，戦後何十年か経って振り返ってみたらできていなかったということになるわけです。学会では，現在，京都の都市景観の問題について提言書を作っていて，もうすぐできるのですが，前もって各方面の意見を聞くと，一番責任が重いのは学会ではないですかとよく言われます。今は学会も木造を重視していますが，非常に大切なときに見捨ててしまったとか，あるいは都市のゾーニングや高さの問題で，見通しを見誤ったとか...大学教育の面でも，木造の教育を軽視してきたとか...ですから，我々は反省を込めて提言しているわけですが，今後そのような過ちを犯さないように自己点検をする必要がありますね。

石田：　そのような社会からの声が，ある種の外部評価ですが，それらをどのように専攻に反映させていくかですね。

平成14年5月9日，建築本館会議室にて